

[A年] 聖霊降臨節第19主日(2021年9月26日)**【旧約聖書日課】コヘレトの言葉3章1～13節**

1 何事にも時があり

天の下の出来事にはすべて定められた時がある。

2 生まれる時、死ぬ時

植える時、植えたものを抜く時

3 殺す時、癒す時

破壊する時、建てる時

4 泣く時、笑う時

嘆く時、踊る時

5 石を放つ時、石を集める時

抱擁の時、抱擁を遠ざける時

6 求める時、失う時

保つ時、放つ時

7 裂く時、縫う時

黙する時、語る時

8 愛する時、憎む時

戦いの時、平和の時。

9人が労苦してみたところで何になるう。

10わたしは、神が人の子らにお与えになった務めを見極めた。11神はすべてを時宜にかなうように造り、また、永遠を思う心を人に与えられる。それでもなお、神のなさる業を始めから終りまで見極めることは許されていない。

12わたしは知った

人間にとって最も幸福なのは喜び楽しんで一生を送ることだ、と

13人だれもが飲み食いし、その労苦によって満足するのは、神の賜物だ、と。

【使徒書日課】テサロニケの信徒への手紙二3章6～13節

6兄弟たち、わたしたちは、わたしたちの主イエス・キリストの名によって命じます。怠惰な生活をして、わたしたちから受けた教えに従わないでいるすべての兄弟を避けなさい。7あなたがた自身、わたしたちにどのように倣えばよいか、よく知っています。わたしたちは、そちらにいたとき、怠惰な生活をしませんでした。8また、だれからもパンをただでもらって食べたりはしませんでした。むしろ、だれにも負担をかけまいと、夜昼大変苦勞して、働き続けたのです。9援助を受ける権利がわたしたちになかったからではなく、あなたがたがわたしたちに倣うように、身をもって模範を示すためでした。

10実際、あなたがたのもとにいたとき、わたしたちは、「働きたくない者は、食べてはならない」と命じていました。11ところが、聞くところによると、あなたがたの中には怠惰な生活をし、少しも働かず、余計なことをしている者がいるということです。12そのような者たちに、わたしたちは主イエス・キリストに結ばれた者として命じ、勧めます。自分で得たパンを食べるように、落ち着いて仕事をしなさい。13そして、兄弟たち、あなたがたは、たゆまず善いことをしなさい。

【福音書日課】マタイによる福音書20章1～16節

1「天の国は次のようにたとえられる。ある家の主人が、ぶどう園で働く労働者を雇うために、夜明けに出かけて行った。2主人は、一日につき一デナリオンの約束で、労働者をぶどう園に送った。3また、九時ごろ行ってみると、何もしないで広場に立っている人々がいたので、4『あなたたちもぶどう園に行きなさい。ふさわしい賃金を払ってやろう』と言った。5それで、その人たちは出かけて行った。主人は、十二時ごろと三時ごろにまた出て行き、同じようにした。6五時ごろにも行ってみると、ほかの人々が立っていたので、『なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか』と尋ねると、7彼らは、『だれも雇ってくれないのです』と言った。主人は彼らに、『あなたたちもぶどう園に行きなさい』と言った。8夕方になって、ぶどう園の主人は監督に、『労働者たちを呼んで、最後に来た者から始めて、最初に来た者まで順に賃金を払ってやりなさい』と言った。9そこで、五時ごろに雇われた人たちが来て、一デナリオンずつ受け取った。10最初に雇われた人たちが来て、もっと多くもらえるだろうと思っていた。しかし、彼らも一デナリオンずつであった。11それで、受け取ると、主人に不平を言った。12『最後に来たこの連中は、一時間しか働きませんでした。まる一日、暑い中を辛抱して働いたわたしたちと、この連中と同じ扱いにすることは。』13主人はその一人に答えた。『友よ、あなたに不当なことはしていない。あなたはわたしと一デナリオンの約束をしたではないか。14自分の分を受け取って帰りなさい。わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。15自分のものを自分のしたいようにしては、いけないか。それとも、わたしの気前のよさをねたむのか。』16このように、後にいる者が先になり、先にいる者が後になる。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

コヘレトの言葉3章1～13節

- 1 天の下では、すべてに時機があり
すべての出来事に時がある。
- 2 生まれるに時があり、死ぬに時がある。
植えるに時があり、(植えたものを)抜くに時がある。
- 3 殺すに時があり、癒やすに時がある。
壊すに時があり、建てるに時がある。
- 4 泣くに時があり、笑うに時がある。
嘆くに時があり、踊るに時がある。
- 5 石を投げるに時があり、石を集めるに時がある。
抱くに時があり、ほどくに時がある。
- 6 求めるに時があり、失うに時がある。
保つに時があり、放つに時がある。
- 7 裂くに時があり、縫うに時がある。
黙するに時があり、語るに時がある。
- 8 愛するに時があり、憎むに時がある。
戦いの時があり、平和の時がある。
- 9人が労苦したところで、何の益があるうか。
- 10私は、神が人の子らに苦勞させるよう与えた務めを見た。11神はすべてを時に適って麗しく造り、永遠を人の心に与えた。だが、神の行った業を人は初めから終わりまで見極めることはできない。
- 12 私は知った
一生の間、喜び、幸せを造り出す以外に
人の子らに幸せはない。
- 13 また、すべての人は食べ、飲み
あらゆる労苦の内に幸せを見いだす。
これこそが神の賜物である。

テサロニケの信徒への手紙二3章6～13節

6きょうだいたち、私たちの主イエス・キリストの名によって命じます。怠惰な生活をして、私たちから受けた教えに従わないすべてのきょうだいを避けなさい。7どのように私たちを見習うべきかは、あなたがた自身がよく知っています。私たちは、あなたがたの間で、怠惰な生活を送りませんでした。8また、誰からもパンをただでもらって食べたりしませんでした。むしろ、誰にも負担をかけまいと、労苦し骨折って、夜も昼も働いたのです。9私たちに権利がなかったからではなく、あなた

がたが私たちに倣うように、身をもって模範を示すためでした。10実際、あなたがたのもとにいたとき、私たちは、「働こうとしない者は、食べてはならない」と命じていました。11ところが、聞くところでは、あなたがたの中には、怠惰な生活を送り、少しも働かず、余計なことをしている者がいるということです。12そのような者たちに、主イエス・キリストにあって命じ、勧めます。落ち着いて働き、自分で得たパンを食べなさい。

13きょうだいたち、あなたがたは、たゆまず善を行いなさい。

マタイによる福音書20章1～16節

1「天の国はある家の主人に似ている。主人は、ぶどう園で働く労働者を雇うために、夜明けとともに出かけて行った。2彼は、一日につきデナリオンの約束で、労働者をぶどう園に送った。3また、九時ごろ行ってみると、何もしないで広場に立っている人々がいたので、4『あなたがたもぶどう園に行きなさい。それなりの賃金を払うから』と言った。5それで、彼らは出かけて行った。主人はまた、十二時ごろと三時ごろに出て行って、同じようにした。6五時ごろにも行ってみると、ほかの人々が立っていたので、『なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか』と言った。7彼らが、『誰も雇ってくれないのです』と答えたので、主人は、『あなたがたもぶどう園に行きなさい』と言った。8夕方になって、ぶどう園の主人は管理人に言った。『労働者たちを呼んで、最後に来た者から始めて、最初に来た者まで順に賃金を払ってやりなさい。』9そこで、五時ごろに雇われた人たちが来て、一デナリオンずつ受け取った。10最初に雇われた人たちが来て、もっと多くもらえるだろうと思っていたが、やはり一デナリオンずつであった。11それで、受け取ると、主人に不平を言った。12『最後に来たこの連中は、一時間しか働かなかったのに、丸一日、暑い中を辛抱して働いた私たちと同じ扱いをなさるとは。』13主人はその一人に答えた。『友よ、あなたに不当なことはしていない。あなたは私と一デナリオンの約束をしたではないか。14自分の分を受け取って帰るなさい。私はこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。15自分の物を自分のしたいようにしては、いけないのか。それとも、私の気前のよさを妬むのか。』16このように、後にいる者が先になり、先にいる者が後になる。」

黙想のためのノート**次主日教会暦と聖書日課について**

・9月26日「聖霊降臨節第19主日」の日課主題は「労働の意味」。旧約聖書日課は、「コヘレトの言葉」から、「時」を考察する箇所。使徒書日課は、「テサロニケの信徒への手紙二」から、終末信仰によって怠惰な生活に陥っている信徒を戒め日々の労働を勧める箇所。福音書日課は、「マタイによる福音書」から、「ぶどう園の労働者のたとえ」の箇所。

旧約日課(コヘレト3章より)

・「コヘレトの言葉」は、ヘブライ語聖書正典中「諸書」に含まれる文書で、「箴言」「雅歌」などととも「ソロモン」に帰された「知恵」の書である。ユダヤ教の伝統では、「雅歌」「哀歌」「ルツ記」「エステル記」と共に「ハメシュ・メギロット(五つの巻物)」と呼ばれるまとまりで扱われる。また、アシュケナージ系ユダヤ人社会(中世以降、ドイツ・東欧地域に定住した白人系ユダヤ人)では、仮庵祭の期間中に会堂で朗読される習慣がある。書名は1:1から取られているが、「コヘレト」はヘブライ語で「集める」を意味する「カーハル」の名詞化された語で、「集会者」なども訳されてきた。口語訳聖書では「伝道者」と訳し、書名を「伝道の書」としている。本書は、形式上、ソロモン王に帰されているが、ペルシャ語由来の用語が複数みられることなどから、バビロン捕囚後のペルシャ帝国支配の時代、あるいはその後のヘレニズム(ギリシア人の支配の)時代に完成された文書と考えられている。

・「コヘレトの言葉」は、「王」であるところの「コヘレト」が、人生経験を通して観察した世界の諸々の営みについて考察し、厭世的な結論に傾きながらも、なおその中から「神の摂理」を見出し、人生の意味を明らかにしようとする試みが展開されている。正典「律法と預言者」に見られるような無条件に前提とされる「神」認識は示されず、経験的・帰納的な合理性に基づいた推論として「神」を認識しようとする傾向にある。このような神学的試みが展開されるのは、本書が編纂される当時すでに「正典」として成立・確立しつつあった「律法と預言者」の神学に対する疑念あるいは異論を提示する意図があったとも考えられる。ペルシャ支配時代は多文化交流が進んだ時期であり、物事を相対化して考察することが広汎に行われるようになった時代であったことが背景にある。

・日課箇所は、「時に関する教え」として知られる。一連の「時」と訳されている語の内、冒頭の「時」のみヘブライ語「ゼマーン」の訳で、他はすべて「エート」の訳であるが、両語の使い分けは不詳。「エート」は、旧約中で300例近くある一般的な用語であるが、「ゼマーン」の用例は限定的で、「コヘレトの言葉」中ではこの一箇所のみ。「ゼマーン」はアラム語由来の「外来語」であることが知られており、一種の修辭的なアクセントとして使用しているだけなのかもしれない。

使徒書日課(Ⅱテサロニケ3章より)

・「テサロニケの信徒への手紙二」は、「手紙一」と共に、使徒パウロが「シルワノ、テモテ」との連名で、自ら開拓創設した「テサロニケの教会」に宛てて送った書簡とされている。批判的な新約学者は、本書簡「手紙二」に見られる終末観などが「手紙一」と大きく異なり、時代の隔たりがある可能性があると考え、パウロの弟子らによる「第二パウロ書簡」として扱うことがある。日課箇所は、そのような両書簡の差異を示す箇所として指摘されるが、根拠が十分とは言えない。「テサロニケ」は、「フィリピ」と同様「マケドニア州」に位置する港町で、「使徒言行録」によればパウロが「フィリピ」に続いて伝道した地である。「テサロニケ教会」は、「フィリピ教会」と共に「マケドニアの教会」としてひとまとめに扱われることもあるが、両教会の関係は不詳。

・日課箇所は、「怠惰な生活」を戒め、自らの手で働いて日毎のパンを得るべきことが説かれている。背景には、初期教会において福音宣教と共に教えられていたと考えられる「切迫した終末観」の影響があるとされる。「手紙一」4~5章では、主の再臨される終末の切迫していることが当たり前のように前提とされながら、その到来を待ちきれずに不安を抱いている信者に対して、終末が必ず到来することを示し、落ち着いて待つべきことが説かれている。しかし、そこにも見られるように、期待していたようなタイミングでの終末の到来は起こらずに時が経過するにつれて、「終末観」は徐々に「遠い将来の終末」を前提とするものへと変化していったと考えられる。「手紙二」は、そのような「終末観」の変化がすでに始まっていた時期に、なお「切迫した終末」を前提とした考えに基づいて日々の日常生活を疎かにしがちになっていた信者に対して戒めようとしていると考えることができる。

・「怠惰な生活」(6節、11節)は「アタクトース・ペリパトウントス」という表現で、直訳すれば「不規則／無秩序に歩く」ということ。使徒パウロは、福音宣教において「自由にされる」という概念を重視する一方、実際の教会の営みにおいては秩序を重んじる傾向があったと考えられる。ここでも、「怠惰」というような生活態度を問題にしているというよりも、共同体組織としての秩序を壊してしまうような振る舞いを問題にしているのだろう。特に「食事」の問題は、やめや貧しい者を援助するという教会共同体の存在意義に関わる事柄に直結しており、「テモテへの手紙一」5章などでも教会の相互扶助を本当に必要としていない者がそれを当てにすることがないようにとの戒めが示されている。そこにたとえ悪意がなくても、「ただ乗り」が横行することによって本当に援助が必要な者に援助が行き渡らないということは、おそらく繰り返し各教会で問題になっていたのであろう(使徒6章の「食事の世話をする奉仕者」七人の選任も、同様の事態を踏まえていると見ることが出来る)。

福音書日課(マタイ 20 章より)

・日課箇所は、「天の国」のたとえとして語られた「ぶどう園の労働者のたとえ」。「マタイ福音書」だけが伝えているたとえであるが、前段「金持ちの青年との対話」の逸話に付加した形となっており、「金持ちの青年との対話」の逸話の最後の句(19:30「しかし、先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になる」)を繰り返すことによって(20:16)、この句の意味するところを示す「たとえ」として付加していることを明らかにしている。

・15 節「わたしの気前の良さを妬むのか」の直訳は、「わたしが善い者(アガソス)であることが、あなたの悩み(ポネーロス)なのか」である。これは、前段「金持ちの青年との対話」の冒頭で、「善いこと(アガソス)」が問われ、主イエスの応答が「善い方(アガソス)はお一人である」とされていることを受けたものである。つまり、青年に対して主イエスが教えられた「善いこと」を「完全」になさるところの神は、実際にどのように振る舞われるのかということを示すたとえとして、日課箇所は置かれている。別言すれば、主イエスが青年に対して「完全になりたいのならば」として示された「持ち物を売り払い、貧しい人々に施し…」という徹底の難しい実践を、「マタイ福音書」は、日課箇所のたとえを提示することで実践可能な教えに緩和させてみせているのかもしれない。「わたしたちは何もかも捨てて…従ってまいりました」(19:27)と言うペトロをはじめとする弟子たちの教会では、「捨ててきた」ことの報いとして多くの恵みが与えられるとされており、その「神の恵み」をどのように用い、扱い、人々を「ぶどう園」にたとえられる「天の国」に招き入れるべきかが問われたであろう。

・主イエスの「ぶどう園のたとえ」と言えば、共観福音書が共通して伝えている「ぶどう園と農夫のたとえ」が知られている(マタイ 21 章、マルコ 12 章、ルカ 20 章)。「ぶどう園(アンペローン)」を用いたたとえは、この「ぶどう園と農夫のたとえ」と日課箇所の「ぶどう園と労働者のたとえ」以外に知られていない。「ぶどう園と農夫のたとえ」は、主イエスの最後の一週間を物語る「受難物語」の中に組み込まれており、端的に主イエスの「受難と死」を示すものとなっている。一方、日課箇所の「ぶどう園と労働者のたとえ」は、「天の国のたとえ」であり、「ぶどう園と農夫のたとえ」のように登場人物と実在の人物が一对一で対応するようには必ずしもなっていない。

来週の誕生日 (9月26日～10月2日)

主日礼拝の讚美歌から

・21-361 番「この世はみな」(= I 90 番「ここもかみの」)は、19 世紀末米国長老派牧師モルトビー・D・バブコックの作詞で、原歌詞は 16 節ある。曲は 19-20 世紀米国で教会音楽家として活動したフランク

ン・シェファードの作曲とされているが、原曲はイギリス民謡によるとされている。曲名の「TERRA BEATA」は、ラテン語で「祝福の大地」という意味。

- ・21-171 番「かみさまのあいは」(= 40 番)は、カトリック司祭・佐久間彪が作詞した創作詩編歌(148 編)で、1980 年版『典礼聖歌』に所収後、1987 年版『こどもさんびか2』に採用された。ローマ・カトリック教会は 1960 年代に開催した第 2 ヴァチカン公会議の結果、それまでの世界共通ラテン語典礼という原則を大転換し、信徒が完全に母国語でミサにあずかるという原則で典礼改革が行われた。以来、数多くの日本語典礼聖歌が創作され、その中からプロテスタント讚美歌に導入されたものも少なくない。プロテスタントとの共同翻訳である『聖書・新共同訳』も、この典礼改革の一環で行われたもの。佐久間司祭は、日本でこの典礼改革を担った委員の一人。
- ・21-566 番「むくいを望まで」(= I 536)は、19 世紀米国でフレンド派の家庭に育ちユニバーサリスト派の牧師として矯風運動にも携わったフィービ・ハナフォードがコヘルト 11:1 に着想を得て作詞。曲は不詳。

21-361「この世はみな」**THIS IS MY FATHER'S WORLD**

1. This is my Father's world, / And to my listening ears / All nature sings, and round me rings / The music of the spheres. / This is my Father's world: / I rest me in the thought / Of rocks and trees, of skies and seas; / His hand the wonders wrought.
2. This is my Father's world, / The birds their carols raise, / The morning light, the lily white, / Declare their maker's praise. / This is my Father's world, / He shines in all that's fair; / In the rustling grass I hear him pass; / He speaks to me everywhere.
3. This is my Father's world. / O let me ne'er forget / That though the wrong seems oft so strong, / God is the ruler yet. / This is my Father's world: / why should my heart be sad? / The Lord is King; let the heavens ring! / God reigns; let the earth be glad!

21-566「むくいを望まで」**Cast Thy Bread upon the Water**

1. "Cast thy bread upon the waters, / Ye who have but scant supply; / Angel eyes will watch above it; / You shall find it by and by; / He who in his righteous balance, / Doth each human action weigh, / Will your sacrifice remember, / Will your loving deeds repay.
2. "Cast thy bread upon the waters; / Sad and weary, worn with care, / Wherefore sitting in the shadow? / Surely you've a crumb to spare. / Can you not to those around you / Sing some little song of hope, / As you look with longing vision / Thro' faith's mighty telescope?
3. "Cast thy bread upon the waters," / Ye who have abundant store; / It may float on many a billow, / It may strand on many a shore; / You may think it lost forever, / But, as sure as God is true, / In this life, or in the other, / It will yet return to you.